

# 瓔珞みがく

(大正九年桜星会歌)

佐藤一雄君 作歌

置塩寄君 作曲

## 一

瓔珞みがく石狩の  
源遠く訪ひくれば

原始の森は闇くして  
雪解の泉玉と湧く

## 二

浜茄子紅き磯辺にも  
鈴蘭薫る谷間にも

愛奴の姿薄れゆく  
蝦夷の昔を懐ふかな

## 三

今円山の桜花  
歴史は旧りて四十年

我が学び舎の先人が  
建てし功はいや栄ゆ

## 四

その絢爛の花霞  
憧憬れ集ふ四百の

健児が希望深ければ  
北斗に強き黙示あり

## 五

醜雲消えて人の世に  
陽光はうららかに輝けど

風の名残のつきやらで  
狂瀾さわぐ今し今

## 六

潮に暮るる西の空  
月も凍らむシベリアの

吾が皇軍を思ひては  
猛けき心の躍らずや

## 七

白銀狂ふ埋れ路も  
踏みて拓かむわが前途

はろけき牧場に嘯けば  
雲影はやし草の波

## 八

想を秘めし若人が  
唇かたくほほゑみつ

仰げば高く聳え立つ  
羊蹄山に雪潔し